＜今日の説教のポイント　ローマの信徒への手紙 3 章 21～31 節＞

① 来たる 10 月 31 日は、教会にとって大切な「宗教改革記念日」。

「10 月 31 日は何の日？」と聞かれると、多くの人々は「ハロウィーン」と答えるのではないでしょうか。しかしプロテスタントの教会に所属する私たちは、この日が「宗教改革記念日」であることを、改めて確認したいと思います。

② ルターの投げ掛けた問題提起が、宗教改革運動へと発展する。

この宗教改革を行ったマルティン・ルターは、ドイツのヴィッテンベルク大学で聖書を教える神学教師でした。1517 年 10 月 31 日、ルターは免罪符（贖宥状）を非難する「95 箇条の論題（贖宥の効力に関する 95 箇条の提題）」を発表しました。ルターは神学教師であり、当初はローマ・カトリック教会の権威に楯突こう等という考えは毛頭なく、論争相手を求めたに過ぎなかったとも言われます。しかしルターの問題提起は、大きな波紋を投げ掛けました。森の中に投げ入れられた、たった一本のマッチの火が、森全体を火で焼き尽くす程の大きな山火事を引き起こすように、宗教改革運動はヨーロッパ全土に広がりました。

③ 「万人祭司」の考えに基づき、伝道の業に積極的に参与する。

ルターは議会に出頭するよう命じられ、これまでの発言を撤回するよう求められます。しかし彼はその命令を拒否し、自説を撤回しませんでした。その時にルターが言ったのが、「我ここに立つ。私にとって他に道はない。神よ、私を助け給え。アーメン」という有名な言葉でした。ルターは異端と断定され、追放の身となりますが、新約聖書を母国語のドイツ語に翻訳したり、会衆が母国語で歌える讃美歌を作る等、大きな貢献をしました。この説教が終わった後、ご一緒に歌う『讃美歌 21』の 377 番「神はわが砦」は、ルターによって作られた讃美歌です。

母国語で聖書を読み、讃美歌が歌えるようになったことにより、礼拝や信仰生活も受動的なものから能動的なものへと変えられて行きました。「万人祭司」という考えも能動的です。福音を解き明かすのは祭司だけでなく、信じる者すべてに与えられた権利であり、義務でもある。一人ひとりが感謝と喜びをもって、伝道することが求められています。